



図1 TOPIXの推移

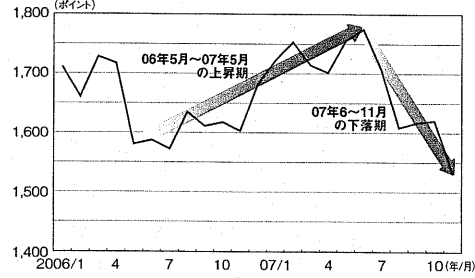
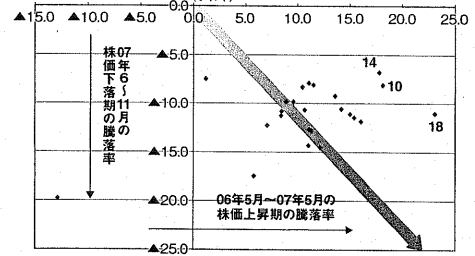


図2 相場上昇期と下落期のパフォーマンスバランス図



格には相当の幅がある。しかし、ここでは詳細は問わないこととし、「国内株式一般型」(投資信託協会分類による)について、相場上昇期と相場下落期の個別ファンドのパフォーマンスをチェックしてみた。

図1における「06年5月~07年5月」と「07年6月~11月」とした。それぞれの時期におけるTOPIXの騰落率はプラス11.1%、マイナス12.7%である。

さてこのような観点から注目していいファンドはどれか。最初に目につくのが14の「トヨタグループ株式ファンド」、10の「みずほ好配当日本株オープン」、18の「アクティブパリュウオープン」。

この線分に近いところに位置しているファンドの中には、左上(ゼロ地点に近い)ものは基準価額の変動率が低く、右下になればなるほど変動率が高い。

「アクティブパリュウオープン」は、平均的な配当率以上の配当性を持つ銘柄群に投資するファンドが総じてパフォーマンスが高いことを示す。「ア

トヨタグループ株式ファンド」は07年半ばまでの相場上昇期の特徴として、円安ドル高による輸出関連国際優良株が先導した相場になったことを端的に示している。「みずほ好配当日本株オープン」は、平均的な配当率以上の配当性を持つ銘柄群に投資するファンドが総じて、パフォーマンスが高いことを示す。「ア



かどかわ そういち 角川 総一

金融データシステム代表。著書に「投資スキルアップ講座」(日本経済新聞社)、「経済の動きが手に入るように見えてくる」(中経出版)、「日本経済新聞の歩き方」(ビジネス教育出版社)など。

表 株価上昇期と下落期のパフォーマンスバランスを見る(国内株式一般型)

Table with 5 columns: Fund Name, Company, Return Rate (Up/Down), Volatility Rate (Up/Down), and TOPIX. Lists 23 funds and their performance metrics.

投資信託(個別ファンド)のパフォーマンスは、第一義的には騰落率で示される。そしてそれがベンチマークが設定されているファンドであれば、そのベンチマーク比で比較されたうえで、その優劣が論じられる。これが最も基本的なファンドのパフォーマンス評価だ。

相場上昇期と下落期の投信成績のバランスをチェックすることで見えてくるもの

去3年」とか「過去5年」といった通期の数値として示されることがもっぱらだ。しかしこのように3年とか5年という期間を通じたパフォーマンスが「通期の騰落率」という単一の数値として示されないう以上、ある任意のファンドの運用成績の相場上昇期と相場下落期の動きの癖をチェックすることはできない。

ところが、世界各国市場との比較においても、わが日本の株価はパツパツとしない。相場が相当の調整を強めて12月14日時点の平均的な株価指数を、今年に入ってから最高値からの下落率で示すと以下のとおり。

Table showing market performance from Dec 14: NY (5.82%), NASDAQ (7.81%), FT100 (4.98%), DAX (1.94%), CAC40 (14.92%), Hang Seng (12.88%), Nikkei (10.56%), Korea (8.22%), Japan (17.38%).